

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04767

研究課題名(和文) 学習者自らが住生活の本質に迫ることを目指す授業の開発とそれによって育つ能力

研究課題名(英文) The development of the class to aim at learner oneself approaching in essence of the house life and ability to be thereby brought up

研究代表者

小川 裕子 (OGAWA, Hiroko)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：20136154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、住生活学習の本質に迫ることができると思う学習内容と学習方法を用意して、小学校、中学校、高等学校のそれぞれ複数校において授業実践を行い、その成果(学習者の学び)を明らかにした。授業実践は、平成29年度、30年度、令和元年度の3年間に、小学校2校、中学校3校、高等学校2校で、改善を加えつつそれぞれ1,2回実施して、令和2年度には、児童・生徒の学びのプロセスや成果から、子どもたちが「今」や「将来」住生活に関して自立して生きていくための能力は何であるのか、それはどのような学習によって獲得することができるのかについて考察して、授業実践を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、住生活に関わる授業実践とその成果(学習者の学び)について、これまでには、家庭科という教科の授業に限定した形で追究されたことはほとんどなく、広く建築学や住居学の研究者による家庭科という1教科に限定しない研究に限られていたが、衣食住の生活や家族・保育を総合的に学ぶ家庭科の授業の一環として、授業実践のベテランも参画して本格的な授業実践に基づいた研究ができたことである。その結果、家庭科の住生活学習の本質、すなわち、子どもたちが「今」や「将来」、住生活に関して自立して生きる能力は何なのかについて一定の成果を得ることができたという点で、本研究の学術的、社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：In this study, we prepared learning contents and learning methods that are thought to be able to approach the essence of living life, and practiced lessons at multiple elementary schools, junior high schools, and high schools, and we were able to clarify the learning of the person. Classes will be practiced once or twice at two elementary schools, three junior high schools, and two high schools during the three years of 2017, 2018, and 2019. In 2020, from the learning process and achievements of children and students, we asked what is the ability of children to live independently in terms of "now" and "future" living life, and what kind of learning can be acquired.

研究分野：家庭科教育学

キーワード：住生活学習の本質 住生活の能力 知識構成型ジグソー法 対話的に学ぶ 学びの深まり

1. 研究開始当初の背景

住生活に関する教育実践の研究は、家庭科教師にとって住生活の内容が不得意分野であることが少なくなく、学校現場で組織的に進められることは少ない。これに対して、建築学や住居学の特に住宅問題の研究者の間で、住生活における住み手の主体性の確立の大切さを背景として、家庭科等学校教育の教科学習を超えた分野で「住教育、住環境教育」として追究する動きは、1980年頃から少しずつ進んでいる。本研究では、以上のような「住教育、住環境教育」の前提として、まず、学校で行われる普通教育の中で、衣食住や保育・家庭生活などを体系的、総合的に学ぶ教科である家庭科における住生活に関する学習の重要性を改めて見直して、そこで育てる能力やそのための学習内容や方法を明らかにする必要性について確認した。

2. 研究の目的

本研究では、家庭科住生活の内容の中から住生活の本質に迫ることが出来ると考えられる学習内容と方法を設定して、それらについて授業実践を行うことを通して学習者に育てることのできた能力について実証的に明らかにする。その際、住生活学習に関する先行研究の成果をもとに、さらに分析・考察を深めて、子ども達が「今」や「将来」、住生活に関して自立して生きるために必要な能力は何なのか、そして、その能力を育む学習内容と方法は何であるのかについて提案することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、平成29、30年度に告示された学習指導要領に示された学習内容を中心に、学習内容が断片的な知識や技能にならないよう(住生活の本質に迫るため)に、内容的なまとまりを持つ題材を設定して、以下の表1に示すように、2017年、2018年に小、中、高等学校において授業を計画・実践して、その成果(子ども達の学び)を明らかにした。

表1 授業実践の概要

分類項目		学習内容	小学校	中学校	高等学校
住宅	規模と構成	家族の生活と住空間の関わり		2017, 18年度、新潟と静岡(2校)で実践	2018年度、静岡で実践
	安全性	災害対策・防犯対策、家庭内事故対策			
	保健性	採光・照明、温度・湿度、通風・換気、騒音、安全な室内の空気環境	2017, 18年度、新潟と埼玉で実践		
	耐久性	整理・整頓、清掃、耐久性	2018年度、新潟で実践		
居住地域	安全性、保健性、利便性、快適性	バリアフリー、まちづくり			
全体	環境対応・持続可能性				

4. 研究成果

研究成果としては、まず、(1)～(4)で、小学校での2実践、中学校での2実践について、学習者の学びについて結果の概要を報告する。その後(5)で、授業実践の成果を踏まえて、子ども達が「今」や「将来」、住生活に関して自立して生きるための能力は何なのか、そのための授業の内容や方法について考えたことを簡単に記す。

(1) 新潟市立A小学校の5年生34人を対象とした、住宅の保健性に関する実験型ジグソー法による授業(タブレット使用)の成果(2017年度実践)

- エキスパート活動における資料の読み取りによる理解と、熱・光・空気環境の原理原則を実験で体感・目視・測定を通じた日常生活の経験則と繋げた理解により、住宅の保健性に関する知識の正答率は75%以上に達し、実験で習得した知識数は資料から得た知識の2倍あった。さらに、児童の記述から、資料から習得した知識の数や内容は限定的であったが、実験を通して得た知識は原理原則や現象に関する認識を高め、具体的な内容に変化していた。以上から、実験を取り入れることで「深い理解」に繋がることがわかった。
- ジグソー活動においては、エキスパート活動で取り組まなかった課題についても75～88%の正答率で理解し、保健性の原理原則を多角的に学習できていた。しかしながら、ジグソー活動の中で、各児童の説明力や聴く力によって、児童の習得知識数には大きな差があることが確認できた。このことから、ジグソー活動時の班員の構成には配慮が必要であるこ

とがわかった。

- 3) クロストークにおいて学級全体で班ごとにわかった内容を交流した結果、各児童の知識が補完・追加され、知識数が増加すると共に、保健性に関わる内容を複合的に捉えることが出来るようになり、思考が体系化された。
- 4) 実験型ジグソー法を取り入れた住宅の保健性に関わる授業では、学習前には量が少なく断片的であった知識が、学習後には複数の保健性に関わる原理原則を踏まえた科学的な認識に高まっていた。さらに、快適で省エネな生活をするための実践的な行動を、複数挙げる事が出来るようになっていた。

(2) (1)の授業を実践者の視点から修正して実践した授業の成果(2018年度、さいたま市立D小学校5年生4クラス155名で実践)

1) 実践者の視点からの修正点

児童全員が4種のエキスパート資料にある、すべての実験を体験する。

実験方法の簡易化。光についての実験を、音に関する実験に変更し、通風・換気の実験など、学校現場で取り組みやすい簡易な方法に変更する。

エキスパート資料の内容を削減し、実験の結果や原理を説明する際に使用する掲示資料を、教師があらかじめ用意する。

学習課題の変更。「現在住む家でより快適で省エネな生活をするためにどんな工夫ができるか」から「4つの実験結果から快適に住まう工夫を考えてみよう」に変更した。

2) 修正した授業の成果

授業後のアンケート記述から、8割近くの児童が「よくわかった」「少しわかった」と回答しており、修正前(1)の授業と同等の理解を得ていることが確認できた。

また、授業中のエピソード記述から、実験方法の説明時に、わざと聞き手を追い詰めたり、聞き手を失敗させることにより、原理の理解に繋がったり、他の教科での学びを活かして原理を説明したりしていた。

1週間後の記述からは、実験において問いかけたり、体験させたりして工夫した説明がされていることがわかった。また、説明をすることの意味を捉え(全員が実験をするため、説明の機会が(1)の授業の4倍必要になる)、自分の学びをメタ認知している児童の存在が確認された。

(3) 新潟市立M中学校1年生5クラス167人を対象とした、「家族の生活と住空間」に関する鳥瞰図を用いたジグソー法による授業の成果(2018年度実践)

1) エキスパート活動を通して、家族の生活と住空間に関する1テーマの基礎知識を資料読解により99%の生徒が理解し、96%の生徒が協働学習に積極的に参加したことにより99%の生徒が理解の深まりを認識した。その結果、Aテーマ(家族と住空間)において、住空間の共同・個人生活空間や時間による生活場所の変化、及び幼児や高齢者の身体や行動の理解度が高かった。Bテーマ(室内環境)の資料で、図や写真で示した方位による明るさや暖かさ・涼しさの相違の理解度が高かったが、その他の室内環境に関する理解度は41%以下で低かった。Cテーマ(日常生活の安全性)で、高齢者の家庭内事故死数の1位と3位の原因であるヒートショックや段差解消の安全策の理解度が高かった。Dテーマ(防災(地震・火災))では、資料で多くの紙面で示されていた地震や火災に備えて取るべき対策の理解度が最も高く、次いで避難経路の理解度が高かった。

2) 鳥瞰図の各部室の特徴を4テーマの内容から協働で把握したジグソー活動において、説明できた側の割合と他テーマの内容を聞いて理解した割合は94%と96%が高かった。各々の内容の理解度はエキスパート活動時の理解度より全般的に減少した。これは習得すべき内容数が多かったことや説明力及び聞いて理解する力が影響していると考えられる。テーマ毎に50%以上の理解度が得られた内容を見ると、Aテーマでは、鳥瞰図の各部室の特徴や相違を確認し、家族の身体や行動の相違を理解した。Bテーマでは、鳥瞰図の各個室の配置による太陽光の入り方の相違を認識して資料内の図や写真から方位による暖かさ・涼しさや明るさの相違を理解できた。Dテーマでは、鳥瞰図上に描いたマークや避難経路に関する内容の理解度が高かった。Cテーマについては、Dテーマでの避難経路の考慮と関連づけて「手すりの設置場所」の理解が高くなった。

3) 各部室における各家族の住まい方の工夫を話し合ったジグソー活動では、多くの班で、和室において複数の家族が生活し、様々なテーマの内容を考慮した住まい方の工夫が複合的に挙げられた。洋室6畳には生徒自身が、洋室8畳には父または祖母が生活することが想定され、部屋の配置やフローリングによる寒さ対策や地震時の家具の転倒防止などの割合が高かった。98%の生徒が住空間の整え方に関する理解が深まった。

4) 班毎に各生徒が担当の部屋の家族の住まい方についてクラス内で発表したクロストークにおいて、Dテーマでは避難時の安全性、Bテーマでは防音対策や空気環境、Cテーマでは転倒・転落防止に関する具体的な対策などの理解度が高く、ジグソー活動までに習得できなかった知識を共有し補完することができた。

5) 学習課題に関する住まい方の工夫に関する記述数が授業後に増大した。授業前には生徒

自身の生活や住空間及び室内環境に関することが主であったが、授業後には家族の身体や行動及び生活行為を考え、日常生活の安全性や室内環境問題の対策、及び地震や火災などへの安全対策を習得できた。

6) 知識構成型ジグソー法の段階的な学習過程において、生徒が家族の生活と住空間に関する基礎的な知識を習得し、協働学習を通して各住空間の特徴を多角的に捉え、各住空間で各家族が健康で快適に安全に生活するための住まい方の工夫を考え、最後に欠けていた知識や工夫内容を共有・補完することにより、住空間の整え方に関する学びが深まったことを明らかにした。今後の課題としては、エキスパート活動資料における理解度の低かった内容の掲載方法や表現方法を再検討することと、授業後の家庭での実践の実態を把握することが挙げられる。

(4) 静岡市立S中学校2年生4クラス159人を対象とした、住生活授業における生徒同士の対話による学びの実態と課題 パフォーマンス課題と解答用紙として平面図を取り入れた、知識構成型ジグソー法による授業を通して (2018年度実践)

本研究では、住生活の授業で深い学びを実現するため、「逆向き設計」論に基づいて、知識構成型ジグソー法にパフォーマンス課題を取り入れた授業を計画して実践した。そして、生徒達の学びについて、ジグソー班ごとに班員の各活動時点の解答の変化から学びのプロセスをたどることによって明らかにした。以下にはその概要と、そこから提案されるジグソー学習を効果的なものにするために重要と考えられることをまとめる。

1) まず、各ジグソー班について対話の深まりの程度によって分類するため、ジグソー活動時に班で一つにまとめた解答を基準として、班員のその前(エキスパート時)と後(最終時)の解答間の差異に注目して4通りに類型化した。

2) 前(エキスパート時)の班員3名の解答は、理論的にはジグソー活動時の班の解答とは異なる班員が多いほど対話は深まると考えられるが、そのためにはエキスパート活動が充実することが重要である。エキスパート資料を充実させることと、資料を個人で読んで内容を理解するだけでなく、理解したことを基にパフォーマンス課題に答えることによって活用したりそれらを交流する機会を設けることが有効であろう。このようにエキスパート活動を充実させることが出来れば、ジグソー活動が充実して対話が深まると共に、今回の授業では最終解でも出現した「偏った解答」(4、19班のA「十分な理由も述べずに、家族5人が居間(または和室)で就寝する」等)を防ぐことも可能なのではないだろうか。

3) 対話の深まった班(類型)では、エキスパート時の解答でS子と祖母の同室就寝を記述した班員を含む場合が半数を超えるが、対話があまり深まっていない班(類型・)では皆無である。転居してきた祖母の住生活について、学習者に身近なS子と同室就寝を考えるとといった自分事として捉えることのできる班員の存在は、班内の対話を深めることにプラスに作用すると考えられる。

4) 祖母の就寝形態(寝具)に関して、ベッド就寝はエキスパート時より最終解で増加すると共に、和室でベッド就寝するケースも増加した。他方で、単独就寝から母(+弟)と同室就寝に変更した場合に、「ベッド」から「無記入」へと変化していた。これは、対話の深まりの程度が低い類型だけでなく、高いと考えられる類型でも認められた。このことから、「無記入」は「布団」と記述することへの抵抗を示す場合も含まれると考えた。S子の住宅の間取りや規模について、5人家族の生活にはぎりぎりだが、ぎりぎりだからこそあれこれ工夫を考える必要があり、教材として適切だと考えていたが、自由に高齢者や家族にとって快適な住生活を考えるためには、課題もあることも明らかになった。

5) S子の個室(単独就寝)志向は、対話の深まりに関わらずいずれの類型、班でも高い。これは、学習者(中学生)の強い住要求でもある。このことを、この学習を通して振り返り、自覚する機会を設けることにより、自分だけではなくすべての人がそれぞれの住要求を持っていることを認識して、想像力を働かせる必要性に気付かせることに繋げたい。本授業では、父の個室確保の必要性は数名から指摘があったが、母のそれについては皆無であった。また、祖母と父の同室就寝について、問題としない班もあった。ジグソー学習では最終時の解答を終えた後、自分の解答を振り返る時間があると、学習はさらに深まると考えられる。

6) 本研究では、以上のようにジグソー班において生徒同士の学び合いが生まれていたことが明らかになり、「逆向き設計」論のもとでジグソー法を位置づけ、パフォーマンス課題を取り入れたことの効果を示すことができた。また、解答用紙に平面図を取り入れたことは、学習者が表現したり新たな考えを生み出すために有効であったと思われる。また、以上の学び合いの様子を実証するためにも有効であった。

(5) 以上の授業実践によって明らかになった学びの実態から、子ども達が「今」や「将来」、住生活に関して自立して生きるための能力は何なのか、また、その能力を育む学習内容と方法は何であるのかについて提案するが、これらの内容については、現在のところ未発表であり(2021年度中に発行を予定している書籍に掲載する)本報告では記述を控えさせ

ていただく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 飯野由香利、小川裕子、伊深祥子、金子京子	4. 巻 63
2. 論文標題 小学校家庭科の住生活における知識構成型ジグソー法に実験を取り入れた科学的な理解を深める授業実践 室内環境の原理原則と児童の経験則を繋げる活動を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 122,133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊深祥子、金子京子、飯野由香利、小川裕子	4. 巻 64
2. 論文標題 実践者の視点からの授業づくり 小学校における住環境に関する実験型ジグソー法による授業	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 58,68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川裕子、伊深祥子、飯野由香利、金子京子、堀池美衣	4. 巻 64
2. 論文標題 中学校家庭科住生活授業における生徒同士の対話による学びの実態と課題 パフォーマンス課題と解答用紙として平面図を取り入れた、知識構成型ジグソー法による授業を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 46,57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯野由香利、渡邊彩子、小川裕子、伊深祥子、金子京子	4. 巻 64
2. 論文標題 中学校家庭科の住生活における知識構成型ジグソー法を取り入れた住空間の整え方に関する学びを深める 授業実践 鳥瞰図を用いて住空間の特徴を多角的に捉える学習を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 34,45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川裕子、吉原崇恵、吉本敏子、星野洋美、室 雅子、安場規子、吉岡良江	4. 巻 51
2. 論文標題 生活場面で実践できる力の実態と家庭科教育の課題 住生活の学習との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 303,317
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田昌子、日景弥生、河野公子、荒井紀子、小川裕子、財津庸子、鈴木民子、鈴木真由子、高木幸子、中西雪夫、野中美津枝	4. 巻 61-1
2. 論文標題 家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査(シリーズ)全国調査の趣旨および高等学校家庭科男女必修の成果と課題を探る社会人調査(数量的データ分析)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 37,45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木幸子、小川裕子、中西雪夫、財津庸子、荒井紀子、河野公子、鈴木民子、鈴木真由子、野中美津枝、日景弥生、藤田昌子	4. 巻 61-2
2. 論文標題 家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査(シリーズ)高等学校家庭科男女必修の成果と課題を探る社会人調査(自由記述分析)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 106,113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野中美津枝、鈴木真由子、鈴木民子、荒井紀子、小川裕子、河野公子、財津庸子、高木幸子、中西雪夫、日景弥生、藤田昌子	4. 巻 61-3
2. 論文標題 家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査(シリーズ)家庭科の意義・役割や生活実態を探る高校生調査および全国調査の総括	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本家庭科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 164,171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下美乃里、小川裕子	4. 巻 25
2. 論文標題 「安全な室内環境の整え方」の授業におけるパフォーマンス課題の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部附属教育実践研究センター紀要	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川裕子、藤原恵里、伊深祥子	4. 巻 6
2. 論文標題 知識構成型ジグソー法による住生活の授業実践の成果と課題 高等学校家庭科「将来の住生活について考える」授業	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 179,187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 飯野由香利、小川裕子、伊深祥子、金子京子
2. 発表標題 小学校における実験型ジグソー法による住環境に関する授業指針の提示
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第62回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊深祥子、金子京子、飯野由香利、小川裕子
2. 発表標題 実践者の視点からの授業づくり 小学校における住環境に関する実験型ジグソー法による授業
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第62回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子京子、伊深祥子、飯野由香利、小川裕子
2. 発表標題 ジグソー法で学ぶ小学校家庭科の授業実践 児童の記述分析から
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第62回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川裕子、吉原崇恵、星野洋美、室雅子、安場規子、吉岡良江、吉本敏子
2. 発表標題 生活場面で実践できる力の実態と課題 住生活の学習に関する能力の養成
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第62回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川裕子、高木優子、飯野由香利、伊深祥子
2. 発表標題 高等学校家庭科における住生活に関する授業実践 ジグソー学習によって自分の将来の住生活を考える授業
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 2019年度例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊深祥子、金子京子、小川裕子、飯野由香利
2. 発表標題 住生活の授業の事例研究 ジグソー法で主体的、対話的に学ぶ住生活の授業
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2018年度例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉岡良江、吉本敏子、小川裕子、星野洋美、室昌子、安場規子、吉原崇恵
2. 発表標題 家族・家庭生活の学習による能力の育成 生活場面で実践できる力の実態と課題
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2018年度例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 星野洋美、吉本敏子、小川裕子、室昌子、安場規子、吉岡良江、吉原崇恵
2. 発表標題 食生活の学習による能力の育成 生活場面で実践できる力の実態と課題
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2018年度例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉本敏子、小川裕子、星野洋美、室昌子、安場規子、吉岡良江、吉原崇恵
2. 発表標題 消費生活と環境の学習による能力の育成 生活場面で実践できる力の実態と課題
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2018年度例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原恵里、小川裕子、伊深祥子
2. 発表標題 高等学校「家庭基礎」における住生活領域の授業実践 知識構成型ジグソー法を用いた「将来の住生活について考える」授業
3. 学会等名 教科開発学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下美乃里、小川裕子
2. 発表標題 中学校家庭科住生活領域の教材開発と授業実践 題材「安全な室内環境の整え方」を中心に
3. 学会等名 教科開発学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川裕子、藤原恵里、伊深祥子、飯野由香利
2. 発表標題 知識構成型ジグソー法による住生活の授業実践の成果と課題 高等学校家庭科「将来の住生活について考える」授業
3. 学会等名 日本家庭科教育学会大会 第61回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子京子、伊深祥子、小川裕子、飯野由香利
2. 発表標題 ジグソー法で学ぶ中学校家庭科の授業開発 住生活授業の生徒の記述分析から
3. 学会等名 日本家庭科教育学会大会 第61回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野由香利、小川裕子、伊深祥子
2. 発表標題 住環境教育における小学生を対象とした実験型ジグソー法に関する研究
3. 学会等名 日本家庭科教育学会大会 第61回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下美乃里、小川裕子
2. 発表標題 中学校家庭科住生活領域における授業実践の実態と課題 静岡県内の中学校教員を対象とした調査結果から
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第60回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川裕子、藤原恵里、伊深祥子
2. 発表標題 高等学校家庭科における住生活領域の教材開発に関する研究 「自分の将来の住生活を考える」授業
3. 学会等名 日本家庭科教育学会 第60回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 荒井紀子、野中美津江、鈴木真由子、鈴木民子、藤田昌子、日景弥生、高木幸子、小川裕子、中西雪夫、財津庸子、河村美穂、赤塚朋子、浅野和子、葛川幸恵、樋口里子、貴志倫子、手塚貴子、志村結美、西岡真弓、今村律子、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 143
3. 書名 未来の生活をつくる 家庭科で育む生活リテラシー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	飯野 由香利 (IINO Yukari) (40212477)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	伊深 祥子 (IBUKA Syouko) (10616551)	浦和大学・こども学部・准教授 (32423)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	金子 京子 (KANEKO Kyoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関